乳管内乳頭腫として経過観察中に乳房超音波検査が契機となり乳癌と診断された２症例

◎齋藤 恵美[1)]、草島 梨沙[1)]、佐藤 譲[1)]、田中 清美[1)]
地方独立行政法人 山形県・酒田市病院機構 日本海総合病院[1)]

【はじめに】当院では、年々増加する乳腺外来患者に対応するため、約１年間のトレーニング期間の後、2017 年 4 月から検査技師による乳房超音波検査（以下 US）を開始した。それまで医師が行っていた経過観察中の US を一日 10～14 件技師が行っている。今回、乳管内乳頭腫（以下 IDP）として経過観察中に、US が契機となり最終的に乳癌と診断された 2 症例を経験したので報告する。

【症例 1】50 代女性【現病歴】2013 年検診マンモグラフィー（以下 MMG）で右局所的非対称性陰影を指摘され当院初診。2014 年の検査では MMG はカテゴリー 1、US では左 D 領域に 7mm 腫瘤を描出、穿刺吸引細胞診（以下 FNA）で悪性が疑われ、針生検（以下 CNB）では悪性を示唆する所見は認められず、良性の IDP が疑われ、以降 1 年毎の検査では変わりなく経過観察していた。2017 年 MMG はカテゴリー 1、技師 US では左 D 領域の以前 CNB したところの腫瘤に、増大(9x8x7mm)とエコー輝度の明らかな低下が見られたため所見として報告。CNB の病理検査で浸潤性乳管癌の診断となり手術を施行した。

【症例 2】40 代女性【現病歴】2015 年検診 MMG で右乳房に集簇性石灰化を指摘され、当院受診。US で右 ED 領域に辺縁平滑な嚢胞内腫瘤あり。FNA では鑑別困難で IDP が疑われ、CNB では悪性の所見なく、観察できる範囲では線維腺腫様の診断であった。以降 1 年毎の MMG,US で著変なし。2018 年右乳頭分泌あり。MMG 変化なし。技師 US で嚢胞内腫瘤は著変なしと報告したが、医師 US では外側に充実性エコーが続いており増大傾向があるように見えた。CNB の病理検査で非浸潤性乳管癌（DCIS）の診断となり、手術を施行した。

【まとめ】2 症例とも、CNB をして悪性所見なしを確認した後に経過観察をしていた腫瘍であったが、3 年目の検査で悪性と診断された。MMG では変化がないこと、以前に病理学的に診断がついていることより、US で過去との比較により変化を読み取らなければ診断が困難であったと考えられる。ゆっくりと年月をかけて変化する癌もあることを念頭に入れ、これからも US で僅かな変化を捉えられるようにしたい。連絡先：0234-26-2001(内線 3296)